



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.154  
2016.7.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第10回 ● 定量的選択と定性的相異の振り子

坪井正五郎が発見し八木奨三郎・下村三四吉に発掘させた椎塚貝塚は、特に大森貝塚との比較において際立つ成果が認められる。貝層と貝層間土層など層位と土器に関する曙光的報告を始め、土器にも先駆的な比較形態学を認めるが、椎塚貝塚の発表時期は坪井正五郎が西ヶ原貝塚の把手の形状分類と大学蔵品の類例検索による全体性徹底の頃で、土器片全体を定性的かつ定量的な分析で手続き化した精密性による「土器様式名称」導出法の構築以前である。

連載初期の具合の良いタイミングであり、モースによる大森貝塚の利便性と柔軟性に富んだ土器所見に準じて展開される両名の比較形態学は、「坪井正五郎氏ガ西ヶ原貝塚ヲ発掘セラレシヨリ、本邦石器時代ノ研究ハ大ニ精密ヲ加フルニ至リ、殆従来ノ面目ヲ一新セリ。」との把手の形状分類と大学蔵品の類例検索の成果賛辞により免罪される。利便性は椎塚貝塚と大森貝塚の完全形や全形を窺えるような標本性の高い多数の図版活用に、柔軟性は関心に依りて形状・紋様・意匠の個体間比較を進める選択活用にあり、しかも結果は偏重に甘んじつつも相互の特徴を存分に導出する分析視点となり、極めて斬新かつ有益である。

山内清男も『日本先史土器図譜』では完全形の形態学的特徴を以て「分類の標準」とする。加曾利貝塚B地点貝層を標準として命名した加曾利B式、特に「細別」の制定では系統と年代が混在する大森貝塚や、年代的な纏まりが層位的にみ

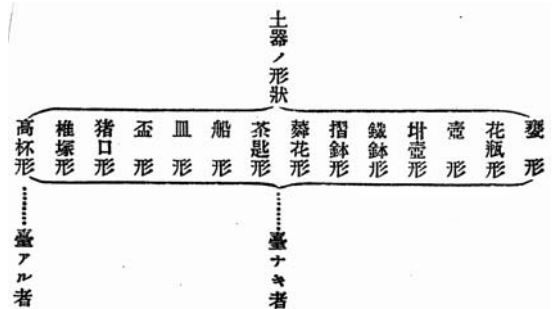
られない椎塚貝塚は「分類の標準」として参画しない。そこに関東地方の複雑な内部構造を層位とともに深耕する型式学を認めるが、至る過程では西ヶ原貝塚の徹底的な全体性、及び定性的かつ定量的な精密性に習う訓練が必須となる。

さて、坪井正五郎が明治27年に「土器様式名称」なる記念碑とともに西ヶ原貝塚の連載報告を(未完)のまま突如として中断するのは、八木奨三郎・下村三四吉が阿玉台貝塚の報告(明治27年4月)で復活させた「相異の土器区分論」(大森式と陸平式)への学術的最先端方法である「優生学」からの対峙(教授の立場からの知的対抗)であるとともに、本意は先住民人種問題にとり椎塚貝塚との相克から見出した新たな社会論的展開への旅立ちにある。前者は中断という警告で終わり、後者は後述とし、先ず加曾利B式研究にとり「相異の土器区分論」と関わる椎塚貝塚の衝撃的な成果を追認する。

椎塚貝塚の土器について大森貝塚を中心とした比較から導出される形状・紋様・意匠の比較形態学は、主に類似と相異、多少、大小などにより課題が生成される。それを簡便かつ直感的に導出するためには大森貝塚の利便性と柔軟性に参照枠を求め、坪井正五郎の徹底的な全体性及び完璧な精密性とは距離を隔てることになる。

先ず「土器ノ形状」に注目したい。「従来知ラレタル貝塚土器ノ形状ニ幾種ヲ加フルヲ得タリ」として第13図が提示される。西ヶ原貝塚の6形状(猪口形/盃形/椀形/鉢形/土瓶形/瓶形)や大森貝塚の7形状(深鉢形/鉢形/浅鉢形/椀形/瓶形/皿形/双口形)に比して、椎塚貝塚では14形状と分類が増えるのは完全形や準じる土器が多いことによる。そうした中で特記すべきは、「高杯形」(第11図7・16・26・28・32・39)と「椎塚形」(第11図12)であり、他に加曾利B式以降の角底2点も報告される。

山内清男の加曾利B式39個体中「高杯形」6点の図示は、大森貝塚図版では1点が指摘され、西ヶ原貝塚報告は2点であることから、その多少の背景には大いに注意すべきである。『日本先史土器図譜』の「加曾利B式(中位の古さ)」でも19点の標本中「高杯形」が2点を占めるほどである。大森貝塚で「高杯形」が少ない現象は「土器型式」の内部系統性由来し、今日の「土器社会論」では器種構成も含む地方差の顕在と理解される。



▲第13図 椎塚貝塚の「土器ノ形状」

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

#### 目次

■加曾利B式土器 定量的選択と定性的相異の振り子(第10回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第147回) 村上伸二 …2
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第3回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2	■考古学者の書棚 「ムシの考古学」 児玉 優 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第3回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 2. 製塩土器への注目(その1)

現在は岡山市となった彦崎貝塚を、当時の東京大学の人類学教室の先生方が総出で調査した時のことである。私とその発掘に参加したのは1948と9年の2回だったが、多くの学生が参加したのは本調査の1949(昭和24)年で、ほぼ70年も昔の話である。太平洋戦争終結から僅か4年目だった。

かつては児島湾に面した児島郡灘崎町(岡山市南区)彦崎にあるこの縄文貝塚は、古くから岡山県内では著名であり、この時の出土縄文土器が、当地方の土器編年標識となって彦崎Z1・Z2とか彦崎K1・K2などがある。2008(平成20)年3月には国指定史跡となった。

当時参加の東大人類学教室やその他の先生方の名前だけを列記させていただくが、みなさんよく知られた方々ばかりではなかろうか。酒詰仲男(後同志社大学)・鈴木尚・中島寿雄・渡辺直経・田辺義一の各氏に、池田次郎氏も時に加わった。しかしまだ戦後の混乱期といえるこの時期に、何故、東大が岡山での縄文貝塚調査だったのか?…実はこの地は、酒詰氏夫人のお里で、しかもここは、岡山県下では児島湾岸の干拓事業によって、有数の米どころでもあった。農家以外の者には、まだまだ食料不足の時「ここでは銀飯が毎日食べられるから」もこの地での調査理由だったとも聞いた。

この調査に参加した私は、遺跡発掘など全く初めて、戦時中に教えこまれた日本の歴史は、神武天皇以来の天皇名の宙覚え、戦後になっても、縄文や弥生と云う言葉もろくに聴くことの無い、ましてや縄文土器の区別など出来ない。それでも彦崎貝塚で、毎日体験した遺跡の発掘で、実物から歴史の一端を知ることの面白さは、自分では意識してなかったのだが、1948年11月の短期調査と、翌年8月の調査での炎天下の17日間を、表土剥ぎも、埋め戻しも一日も休まず通う、原動力だったのかもしれない。

この調査には、近隣数校の高校生が10名ばかり集まったが、連日通ったのは数人だった。たまたま私が参加した調査区で、遺物がよく出土しただけ調子よく現れた他校の学生が、「こんなものは要らないのだ、縄文土器ではない」といって、私が集めていた土器の多くを投げ捨てた。彼の方が縄文土器をよく知っていたようだ。しかし私にはどう見ても古代の土器に見える。「縄文土器で無いならこれは何?」と聞いたが、「こんな土器、海岸に行けば幾らでもある、これを取っていたら大変だ。」というだけで、何であるかの返事はない。先生方も全く関心なし。どうしてこの土器は捨てられるのか。この調査で最も印象に残ったことだった。わたしにとっては「…それでは、何だ」の原点だった。

この土器が気になっていた私は、ほどなくこの土器が師楽式土器と呼ばれ、昭和の初期頃から郷土史の先輩方が、海岸の遺跡を調査し、1939年謄写版刷の『師楽式土器図譜』(水原岩太郎他)が出版されていたことを知った。すでにかつりな地点の遺跡分布も示され、遺跡では大量の土器片と共に、焼土や灰層などを伴うことから、窯址かとの見方もあった。だが後日には製塩遺跡として周知されたこの土器出土遺跡も、当時は馬鹿が作っては捨て、作っては捨てた馬鹿のいた「バカジョ」かなど自虐的な言い方さえあった。

またこの冊子が出る一年前、水原氏と連絡があった国学院大学の樋口清之氏は、瀬戸内海の遺跡を巡って、大阪毎日新聞9月の紙上に談話として、この種の土器は、弥生時代の終わりから祝部式土器(古墳時代須恵器)のある時代「全く特異な文化が生まれた原因は、…今後研究を続けたい」とあったが、その後の研究のことはわからない。

戦後の学制改革で中学・女学校が統合され高校となった。間壁忠彦と葎子は同じ操山高生となり、同じ調査にも多くの仲間と共に加わった。同じ岡山大学法文学部に進んだが、忠彦は法科、葎子は史学科(日本史)。大学にはまだ考古学専攻もなく、共に特に考古学の勉強を目指していたわけではない。

近藤義郎氏が岡山大学医学部助手としての赴任は、1950年。1953年には月の輪古墳発掘で、新しい発掘運動として話題となった。倉敷考古館は1950年11月開館。梅原末治博士を顧問格として、鎌木義昌氏が主事だった。考古館による金蔵山古墳の発掘は、1953年だったが、月の輪古墳調査より前だった。高校以来の岡大生仲間数人と共に発掘に、私もしばしば、忠彦は終始参加。これが考古館と生涯関わる大きな原因だったともいえよう。

その頃から私は、ただ一人で瀬戸内の島々の海岸を、時には泊りがけで見て回った。あの土器が私から離れなかったのだ。当時日本古代史の中で、部民制研究が注目され、その中で海部の性格とあの師楽式土器との関係が気になっていたのだ。こうした遺跡分布調査の時の「おまけ」といってよいのが、あの香川県豊島ダブカス遺跡の発見だった。

この豊島では師楽土器遺跡を、島の西端の水ヶ浦でも発見した。広い入り江のような美しい浜だった。訪れた時海辺に、須恵器・土師器片と共に、問題の土器片などが、うすたかく積まれていて驚いた。工事用の海岸砂採集の際、篩いで選り分けられた「カス」だったのだ。そうしてその後この浜は、高度成長期の負の遺産、産業廃棄物の不法投棄地と化して、マスコミを賑わす事になってしまった。誰一人ここに広大な古墳時代の製塩遺跡があったとはいわない。

## 間壁忠彦 略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国女子短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。



## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 147

## 金平遺跡 ～ 埼玉県嵐山町

村上 伸二

金平(かなひら)遺跡は埼玉県嵐山町にある縄文時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡であるが、マイ・フェイバレット・サイトとしての金平遺跡は、私が1994年から97年にかけて調査を担当した第2地点(22,110㎡)から検出された鎌倉時代の鑄造工房遺跡である。

第2地点は、事前の確認調査により炉壁や鑄型片が出土し、鑄造遺跡と認識されていた。しかし、調査を担当するにあたり私には鑄造遺跡を調査する知識もノウハウもなく、五里霧中の状況であった。そこでまず埼玉県内で1989年に調査された13世紀後半から14世紀前半にかけての大規模鑄造工房遺跡『金井遺跡B区』の調査担当者・赤熊浩一氏に調査方法から個々の遺物の特徴まで手ほどきをうけ、さらに1994年2月に実施された国立奈良文化財研究所(当時)における特別研修『鑄造遺跡調査過程』への参加を皮切りに、鑄造から製鉄関連に関わる研修や講座に可能な限り参加し、考古学だけでなく金属工学も含め、鑄造・製鉄・製銅に関する書籍を購入または図書館で借りてはコピーし、学生時代より集中して猛勉強に励んだのである。勉強したものがすぐに目の前の現場で検証できるのだから、苦しみながらもあれほど楽しい勉強はなかった。しかし、知識の吸収が進んで色々わかってくると今度はわからないことが次々と出てくるのである。これは今も続いているが、真実は近づいた気になると、また離れていってしまう、一生勉強しろということであろう。

調査が進み、金井遺跡とほぼ同時期の鑄造工房であり、梵鐘など仏具を作っている工房の様相が見え始めてきていた1995年の6月。梅雨の小雨の中、傘をさして遺物の取り上げをしていたところ大きな鑄型片が出土し、なにか文字らしきものが彫ってあるような。胸騒ぎをおぼえ、鑄型片を抱え現場事務所まで走り、水洗してみると鑄型なので鏡文字で彫られている。頭の中で文字を左右逆にすると「□友弘安二二」と読める。頭のなかで一瞬(弘安二二…弘安四年…何年だっけ…弘安の役…2度目の元寇…)と考えた次の瞬間「1281年だあ〜!」と叫んでいた。この鑄型により遺跡の実年代が得られて遺跡の注目度も一気に上がり、全国から様々な分野の研究者の方々が見学に訪れ、沢山の貴重なご意見をいただくことができた。



▲「弘安四年」銘仏餉鉢鑄型(左)(右は裏焼きしたもの)

鑄造工房区域からは毎日大量の遺物が出土した。この時期、1000㎡程の調査区に作業員は60人おり①掘り下げ20人②水洗30人③土砂・遺物運搬10人という変則体制だった。区域外に水溜めを3か所掘り、シューターとふるいを組んだ水洗作業場を設けて作業し、毎日100個以上のザルが天日干しで事務所前に並んでいた。出土した遺物は現場での選別・廃棄はせずに全点回収したが、僅か1000㎡の工房区域から22tを越える遺物量となった。

整理作業は1997年から本格的に開始したが、遺物の全体量と整理期間・費用を勘案し、穴澤義功氏と整理方針について検討を重ね、全遺物の微細な分類・検討は困難と判断し、1998年6月まで13か月をかけた3次にわたる選別・分類を行った。最終的に報告書に図として掲載した遺物は2,741点・389,718gであり、総遺物量22.4tの1.7%にとどまったが、全遺物を個別に検証した上で選別し、図示しなくとも全点を分類・数値化し、調査報告として必要な情報は十分に提示したと考えている。

整理作業も進み、鑄造工房の全体像が浮かび上がってきた。遺跡面積は金井遺跡B区と変わらないが、遺構数や鑄型の数などが圧倒的に少ない。しかし遺構の構成、溶解炉の構造や形態、鑄型や鑄造関連遺物の種類等はほぼ同じである。鑄型は仏像・台座・梵鐘・鉢・磬・伏鉢・飾り金具など仏具ばかりであり、弘安四年前後の僅か数年間のみ、特定の寺社への仏具供給のために操業された銅鉄兼業の特殊な「出吹き」工房であり、幕府との関連が強く鎌倉大仏の製作をした河内系鑄物師による操業という考察に至った。

整理に明け暮れた最後の2年間は、朝起きたら整理室に出勤し、7時頃帰宅して風呂と食事を手早く済ませ1時頃まで整理と原稿書きの毎日で土日もなく、肉体的にも精神的にも目いっぱいであった。家族も犠牲にして大変申し訳なく思っているが、2000年12月に650頁に及ぶ報告書が刷り上がったときは全てを殆ど一人でやりきった充実感に胸が熱くなったと同時に「これで終わったんだあ」と深く息を吐き、なんとも言えない安堵感を味わったことを昨日のように憶えている。

私の30代は金平遺跡の調査から報告書刊行に没頭し、鑄造遺跡研究は現在に続いている。報告書刊行時にはわからなかったことがその後、久保智康氏と二人で金平遺跡の鑄型を再検証していて不明鑄型としていたものが不動明王にしか使わない台座の瑟瑟座だと判明したり、五十川伸矢氏と脚立を担いで梵鐘めぐりにして日高市聖天院の梵鐘の竜頭と金平遺跡の鑄型が同汎か同文であり、金平遺跡の鑄物師が物部氏だと確定したりと金平遺跡との関係は今も続いている。文化財担当者ではあったが、金平遺跡の調査担当者となったことをきっかけに研究者の端くれとしての今の自分があり、私にとって金平遺跡はフェイバレットでもあるがグレートフルな遺跡である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは田中 信さんです。

## 考古学者の書棚

## 「ムシの考古学」

森 勇一著／雄山閣(2012)

児玉 優

本書は、昆虫化石から環境変化の変遷を推測し、「過去の人々がどのような環境でどんな生活をしていたか」を探る森勇一氏の研究成果をまとめたものである。

昆虫は、地球上で最も繁栄している生物であり、すべての種の6割を占める最大の生物群である。その数は100万種以上ともいわれ、日本国内でも3万種が記録されている。

昆虫化石については、平成23年5月頃のニュースで話題になったので覚えておられる方も多いかと思うが、奈良県秋津遺跡から縄文時代晩期に埋没したノコギリクワガタの昆虫化石が発見された。この個体はほぼ完形で見つかったが、昆虫化石は完全な姿を保った状態で見つかる例は稀であり、通常は頭部・胸部・腹部の各部位ごとや翅(はね)などが営力の影響を受け、破片となり、あるいは癒着した状況で産出される。そのため昆虫化石の一片一片と現生標本との比較をかさねて昆虫の種類を同定する作業が必要となる。

昆虫によって古環境の復元が可能なのは、昆虫が環境ごとに棲み分けていること、多様な食物に依存して生きていること、環境の変化を鋭敏に反映することが挙げられる。とくに人の活動は自然環境、なかでも昆虫の活動にも変化をもたらすことになる。低地を開墾し水田をつくれればイネ科植物を餌とする食植性昆虫がたかり、食植性昆虫を餌とする肉食性昆虫が生息するようになる。集落内や住居の周りの草木を刈り取れば裸地となる。周辺の畑作植物には葉や茎を好む昆虫が、人間や動物の汚物には食糞性昆虫が集まる。人間が生活のために自然を切り開いたあとには、その環境に適応する昆虫が進出するのである。

本書では、「指標昆虫」という用語が登場する。これは特定の環境下において顕著にみられる昆虫組成である。「水田指標昆虫」は、日本各地の先史～歴史時代の水田耕作土より多産する昆虫を呼ぶ。農業が使われる大正時代まで水田に多く見られる昆虫は、その生活史が水田のサイクルと適合し、弥生時代以後の水田の拡大とともにその個体数を増加させた。また、「汚染指標昆虫」は食屍性昆虫や食糞性昆虫などの一部の昆虫を言い、これらが産出された地表は、人や動物の汚物によって汚染された環境にある。このほかにも人里周辺に生息するヒメコガネなどの「人里昆虫」などがある。

本書の構成は、旧石器～近世にかけての各時期ごとに研究事例をまとめたもので、最後の2章は海外での研究事例と地質時代の事例紹介となっている。「1. 寒さにふるえた北の狩人」「2. 躍動する縄文人」「3. 悪臭漂う弥生ムラ」「4. 火山灰に埋もれた田んぼ」「5. 古代一地方都市の賑わい」「6. 中世農民のフロンティア魂」「7. 信長の米倉」「8. 大名屋敷の台所」「9. アンコール文明と長江文明を探る」「10. 日本にゾウがいたころの昆虫化石」

第1章では、旧石器時代の植物化石・花粉分析・珪藻分析によって復元された古環境と昆虫の生息環境との関係性についてまとめられている。気候の影響を反映し出土する昆虫化石の組成にも変化が生じるが、その変化の速度は植物相が変化するよりも速いため、植物分析試料では検出できない短期間の気候変化にも対応するという。

第2章では、縄文人が自然環境への働きかけを強めていった様子を昆虫化石から読み解く。集落より多くの人里昆虫が検出されており、花粉分析の結果と合わせて、縄文人の植生干渉について示唆している。

第3章では、水田耕作に伴い、食性転換を起こしイネ科植物を加害するようになった稲作害虫と水田指標昆虫の登場、人の集住が引き起こした弥生時代の大規模集落の汚染環境を昆虫化石や珪藻分析から読み解いている。

第4章では、水田指標昆虫から降灰や河川氾濫によって埋没した水田址の変遷を捉えている。また、低湿地の水田とその周辺からは、日本各地でよく似た昆虫組成や珪藻組成を示しており、水田のサイクルと適合した生物が、水田耕作地の拡大とともに繁殖したと述べられている。

第5章では、周防国府とその周囲の環境復元を行っている。出土した昆虫化石からは環境汚染を示す昆虫組成や攪乱された環境指標となる昆虫化石が多数見つかると、人の集住による環境悪化が指摘される。

第6章では、気候の温暖化と人里の拡大によって居住域である農村付近で畑作害虫が増殖した中世の古環境を、遺跡の昆虫組成や遺構から明らかにしている。

第7章と第8章では、近世の城跡・城下町・大名屋敷を構成する遺構から出土した昆虫化石による同定事例で構成されている。

第9章では、アンコールワット近傍に位置する都城アンコールトムの環濠から採取した昆虫化石と中国の四川省に位置する龍馬古遺跡及び湖南省の城頭山遺跡から採取した昆虫化石をもとにした環境復元を行っている。

第10章では、ゾウの足跡が見つかった三重県亀山市の鈴鹿川河床と三重県立博物館建設地の地質時代の層から産出された昆虫化石の事例を中心にまとめられている。

## アルカ通信 No.154

発行日 2016年7月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp